

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 5 月 17 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04351

研究課題名(和文) 幼児期における空想上の存在との出会い体験の意味

研究課題名(英文) The meaning of the experience of encountering fantasy figures in early childhood

研究代表者

富田 昌平 (TOMITA, SHOHEI)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：80342319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：空想上の存在との出会い体験が幼児期の発達において持つ意味を検討した。主な結果は以下の通りである。1. それらの体験を含む遊びや行事は、日本国内で広く盛んに行われている。2. そうした文化的実践への参加は、子どもの好奇心や探究心を刺激し、認知的、感情的、社会的発達を促す。3. 保育者は子どものアイデアの創出や仲間との共有・協働、苦手意識や恐怖の克服を支え促す役割を果たす。4. 子どもは3歳頃まで、空想上の存在概念が不明確なため、出会った実物を本物と見なしやすい。しかし、4、5歳頃になると次第にその概念は明確になり、懐疑的になるとともに、その驚異的で神秘的な空想上の存在概念を楽しむことができるようになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもは遊びや生活の中で様々な空想上の存在と出会う。しかし、それらは「現実でない」ため、子どもが現実に適応する上で役に立たないか、時に有害であると見なされやすい。本研究では、文化的実践への参加という観点から、それらの出会い体験が持つ発達上の重要な意味を明らかにした。また、それらは驚異的で神秘的であるため、現実との混同や恐怖を引き起こし易いことから、特に本物志向の実物の空想上の存在を子どもの前に登場させる場合に、考えられる年齢ごとの実践上の留意点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：We examined the meaning of encountering fantasy figures for early childhood development. The main results are as follows. (1) Plays and events, including encounters with fantasy figures in kindergartens and nursery schools, are widely held in Japan. (2) Children's participation in such cultural practices stimulates their curiosity and inquiry, and promotes cognitive, emotional, and social development. (3) Childcare workers, who are responsible for cultural practice, play a role in supporting and promoting the creation of children's ideas, sharing and collaboration with peers, and overcoming weaknesses and fears. (4) By the age of three, children have an unclear concept of fantasy figures, and therefore it is easy to regard the real fantasy figures they encounter as genuine. However, by the age of four or five, the concept became clearer and more skeptical, and they were able to enjoy the amazing and mysterious concept of figures.

研究分野：発達心理学

キーワード：空想上の存在 想像的探検遊び 空想 想像 魔術的思考 行事 幼児教育・保育

1. 研究開始当初の背景

想像的なものを信じることは、幼児期における想像力の発達にとって不可欠な要素である。幼児期に子どもは様々な空想上の存在 (fantasy figure) との出会いを体験するが、その多くは間接的なものであり、残された物理的証拠や他者による証言などを通して、最終的には自らの想像力を頼りにする必要がある。想像力研究の第一人者である P. L. Harris (2000) は、「想像力は私たちに独特な人間たらしめるものであり、革新や創造、発見の基礎となるものである。そして、子どもは文化的な神話に参加する時、可能性について考える能力を発揮する」と述べている。子どもは空想上の存在との出会い体験を通して想像力を豊かにし、想像力を通して認識や感情を豊かに発達させていくものと考えられる。

幼児期における空想上の存在との出会い体験に関する研究は、これまで発達心理学的アプローチと保育実践的アプローチの2つを柱に行われてきた。

発達心理学的アプローチにおける最初の組織的な研究は1970年代に行われた。Prenticeらは、空想上の存在の中でも特にサンタクロース、歯の妖精、イースターバニーという3つの伝統行事と関連した存在を取り上げ、その認識が幼児期から児童期にかけてどのように発達するかを調査した (Prentice et al., 1978 他)。その後、1990年代から2000年代にかけて、「心の理論」(theory of mind) 研究の隆盛と魔術的信念 (magical belief) や魔術的思考 (magical thinking) に関する研究の高まりの中でいくつか研究が行われ、社会的認知や文化との関連が指摘されるようになった (Rosengren et al., 2000; Subbotsky, 2010 他)。こうした欧米での研究動向を踏まえ、我が国においても1990年代後半以降いくつか研究が行われている (富田, 2002 他)。しかし、これらの研究成果が保育実践にどのように貢献し得るのかについては、十分に議論されていないのが現状である。

他方、保育実践的アプローチにおいて空想上の存在を軸に展開する保育実践が最初に注目されるようになったのは、1980年代半ば頃からである。その契機となった岩附・河崎 (1987) による保育実践書『エルマーになった子どもたち』では、保育園の子どもたちが保育者により提供された物語世界に登場する空想上の存在 (例：りゅう) を軸に想像を膨らませ、その想像を仲間と共有し、集団的な情動の高まりに浸りながら、身体全体で探索・探究を繰り返していく様子が生き生きと描かれている。その後、この種の遊びは「想像的探検遊び」(藤野, 2008) と呼ばれ、保育者や研究者の間で高く評価され、現在に至るまで数多くの類似の実践記録が報告されている。しかし、これらの実践報告の多くは現場の保育者によるものであり、ゆえに系統的で客観的なデータを提供し得るものではなかった。

従って、これら2つのアプローチをつなげ、幼児期における想像力の発達と保育実践の開発に関する研究を発展させることは喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究では、幼児期において空想上の存在との出会い体験はいかなる意味を持つのかを検討することを目的とする。そのために、問題意識と目的の明確化や研究の方法及び内容において、発達心理学的アプローチと保育実践的アプローチとを照合させ、つなげながら研究を進めていくこととする。具体的には、次の5点を明らかにすることを目的とする。第1に、空想上の存在との出会い体験は保育現場においてどの程度、どのように行われており、実践に際しての工夫や配慮はどのように行われているのかを明らかにする。第2に、空想上の存在との出会い体験として、想像的探検遊び、クリスマス行事、節分行事の3つを取り上げ、そこで子どもが直接的または間接的に出会う空想上の存在に対してどのような認識を持ち、加齢に伴いどのように発達させていくのかを明らかにする。第3に、空想上の存在に対する子どもの認識はどのような状況や個人の要因によって揺らぎ易くなり、他の判断や行動に対してどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。第4に、こうした子どもの認識を保育者はどのように捉え、保育の中でどのようなねらいを持ってどのように関わっているのかを明らかにする。第5に、子どもが幼少期に空想上の存在と出会う体験をすることにはどのような意味があるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

研究は(1)保育における空想上の存在との出会い体験全般の現状に関する調査(研究1~2)、(2)想像的探検遊びに関する実践と調査(研究3~7)、(3)サンタクロースとクリスマス行事に関する実践と調査(研究8~10)、(4)鬼・お化けと節分行事に関する実践と調査(研究11~13)という4部13研究に分けられた。以下、順に方法と結果を報告する。

4. 研究成果

(1) 保育における空想上の存在との出会い体験全般の現状に関する調査

研究1では、1980年代以降、保育現場で行われてきた想像的探検遊びについて、実践の全体的な特徴や傾向を、保育系雑誌で掲載されてきた実践報告の収集・整理・分類をもとに明らかにした。その結果、想像的探検遊びの実践報告は114件確認され、それらは1985年の岩附による

エルマー実践以降少しずつ増加し、特に 1996 年から 2000 年にかけて大きく増加し、その後全国において安定的に取り組みられていることが明らかにされた。実践では、恐竜、鬼、忍者、魔女、お化け、やまんばをはじめ、様々な空想上の存在が題材として取り上げられていた。

研究 2 では、保育現場において空想上の存在が登場する遊び・活動（想像的探険遊び）や年中行事（クリスマス、節分）がどの程度行われ、どのような工夫・配慮のもと、どのように展開されているかについて、研究 1 で想像的探険遊びの実践報告が比較的多く確認された地域 85 園と少なかった地域 51 園を対象に、質問紙調査で明らかにした。その結果、過去 3 年以内での想像的探険遊びの実施は 27% の園で確認され、特に非拡大地域（8%）と比べて拡大地域（39%）で多く確認された。また、クリスマス行事と節分行事の実施は大部分（90%と 89%）の園で確認され、その場合、多くの園で大人が扮装した実物が登場していた。さらに、それらを本物志向で登場させる場合、様々な工夫や配慮がなされていることが確認された。

（2）想像的探険遊びに関する実践と調査

研究 3, 4, 5 は保育実践的アプローチの研究であった。研究 3 では、絵本を通じた空想と現実との揺れ動きを楽しむ実践について、実践の具体例を得るとともに、子どもの年齢ごとの特徴や保育者がそれを子どもと楽しむ際の実践上の工夫や配慮について、実践の内容分析をもとに検討した。研究 4 では、ある幼稚園の 4 歳児クラスで出現したと子どもたちに信じられた「かっぱおやじ」という空想上の存在について、その後の 1 年間の観察とインタビューをもとに、それが子ども同士でどのように生成し、仲間同士で共有されていったか、その存在についての遊びはどのように展開し、子どもにとってどのような意味を持つものであったかについて検討した。研究 5 では、研究 4 の「かっぱおやじ」が子どもの家庭ではどのように受け止められ、家庭での遊びがどのように展開していったかについて、保護者に対する質問紙調査をもとに検討した。これら 3 つの研究の結果、見かけの表象に中心化しやすい 2, 3 歳頃から、見かけは似通っていても本物ではない可能性に意識が向き始める一方で、やはり本物かもしれないと揺れ動く 4 歳頃を経て、5 歳頃になると仲間同士でイメージや知識を共有し、ともに謎解きを楽しむようになる子どもの発達の姿が明らかにされた。

研究 6, 7 は発達心理学的アプローチの研究であった。研究 6 では、大人から「恐竜の卵」とされるものを提示された時、子どもはそれをどのようなものとして認識し、それに対してどのような行動を示すのかについて、4 歳児を対象とした実験で検討した。研究 7 では、違反行為への誘惑にさらされる状況下（新しい玩具を提供されるが、見てはいけないと指示される）で、「お化けの絵」を見張り役として提示された時、子どもはそれが不在の時よりも存在するときのほうが違反行為を抑制するのかどうかを、3 歳児と 5 歳児を対象に実験で検討した。これら 2 つの研究の結果、子どもはそれがたとえ虚構であるとわかっていても、実際に本物らしき実物や外的表象を提示されると、空想と現実とが容易に揺らぎ、空想が現実の行動に影響を及ぼすことが明らかにされた。

（3）サンタクロースとクリスマス行事に関する実践と調査

研究 8 は保育実践的アプローチであった。本物志向のサンタクロースを登場させている幼稚園・保育園のクリスマス行事に参加・観察し、実践の具体例を得るとともに、年齢ごとの子どもの受け止め方の違いや保育者の工夫や配慮について明らかにした。研究 9 と 10 は発達心理学的アプローチの研究であった。研究 9 では、異なる時間帯や異なる場所でのサンタクロースとの出会い報告に対して、その本物 - 偽物判断と理由について 4, 5 歳児を対象に求めることにより、子どもがサンタクロースの現実世界をどのように認識しているかを実験的に探った。その結果、4 歳児は本物 - 偽物判断とその理由説明において、サンタクロースが登場した時間帯や場所をあまり考慮に入れていないが、5 歳児になるとそれらを考慮するようになることが明らかにされた。研究 10 では、2000 年代以降、高度経済成長により欧米の文化を広く取り入れるようになった中国において、クリスマス文化とサンタクロース神話はどのように受容されているかを、Web 上の記事の内容分析と中国人留学生への質問紙調査から検討した。

（4）鬼・お化けと節分行事に関する実践と調査

研究 11 は保育実践的アプローチであった。本物志向の鬼を登場させている保育園の節分行事に参加・観察し、実践の具体例を得るとともに、年齢ごとの子どもの受け止め方の違いや保育者の工夫や配慮について明らかにした。研究 12 と 13 は発達心理学的アプローチの研究であった。研究 12 では、鬼と同様に恐怖感情を喚起させるお化けについて、3, 4, 5 歳児はどのように認識しているかを個別インタビューにより探った。その結果、お化けについてのイメージや知識は 4, 5 歳頃に増加し、容易に出会えないものとして認識するようになることが明らかにされた。研究 13 では、幼児期を通じて少しずつ発達するとされる怖いもの見たさ行動について、その行動の促進や抑制にかかわる要因を 4, 5 歳児を対象に実験的に検討した。その結果、特に男児において、怖いものを想像する余地が小さいほど（想像の利用可能性が低いほど）、あるいは単独ではなく仲間とともに判断を求められた時ほど、怖いもの見たさ行動をより生じさせることが明らかにされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 富田昌平・小澤瑞希	4. 巻 71
2. 論文標題 幼児はお化けをどのように認識しているのか？	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 315-325
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 富田昌平	4. 巻 39
2. 論文標題 保育における想像的探険遊びの展開：エルマー実践から30年の節目を超えて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 74-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 富田昌平	4. 巻 27
2. 論文標題 幼児における手品の不思議を楽しむ心の発達と対象への親和性との関連	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 乳幼児教育学研究	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 富田昌平・甲斐優香	4. 巻 70
2. 論文標題 幼児の道徳行為の実践における空想上の存在の影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 327-335
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田昌平	4. 巻 295
2. 論文標題 日常の中に潜む不思議さ・面白さ(特集 日常の生活から気づき, わかる喜びへ)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊保育問題研究	6. 最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田昌平・近藤彩乃	4. 巻 69
2. 論文標題 恐竜の卵は本物か? : 幼児における想像と現実との揺らぎ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 235-244
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 富田昌平	4. 巻 25
2. 論文標題 保育における空想上の存在との出会い体験:実践の展開と工夫・配慮	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 家庭教育研究	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田昌平	4. 巻 16
2. 論文標題 中国におけるクリスマス文化とサンタクロース神話の受容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学国際交流センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 富田昌平・久世彩加	4. 巻 72
2. 論文標題 かっぱおやじは幼児の家庭生活にどのように拡がったか? : 幼稚園から家庭へのローカルな空想上の存在の展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要(教育科学)	6. 最初と最後の頁 189-198
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 富田昌平・久世彩加・河内純子	4. 巻 72
2. 論文標題 幼児はかっぱおやじとどのように出会うのか? : 幼稚園におけるローカルな空想上の存在の生成と共有	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要(教育科学)	6. 最初と最後の頁 335-350
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 富田昌平・伊藤 梓・園田ひかり	4. 巻 42
2. 論文標題 幼児の怖いもの見たさ行動を規定する要因の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 幼年教育研究年報	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 木下孝司・若林紀乃・山田真世・富田昌平・川田 学
2. 発表標題 発達心理学と保育実践の交差点に潜む「発達」をめぐる問い: 「年齢」問題から見えるもの
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 外山紀子・中島伸子・富田昌平・加藤義信
2. 発表標題 魔術的思考の発達から伝統的発達観を問い直す
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野美和・浅野卓司・深田昭三・小林哲生・佐藤朝美・富田昌平
2. 発表標題 子どもの遊びと学びの環境を考える：デジタルとアナログをどう繋いでいくか
3. 学会等名 日本発達心理学会東海地区シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 富田昌平・岩附啓子・田中浩司・服部敬子
2. 発表標題 保育の場で子どもの遊び心をはぐくむ
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第28回大会・学会企画シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中野 茂・松崎洋子・富田昌平・田 暁潔・加用文男
2. 発表標題 遊びの機能とは？：改めて問う
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 滝口圭子・富田昌平・浅川淳司・布施光代・深田昭三
2. 発表標題 保育の中の科学：数概念と生物概念の発達から実践をみつめる
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金田利子・小松 歩・滝口 優・山路千華・麻生 武・富田昌平
2. 発表標題 遊びと遊び心の違いと関連性
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 富田昌平・利根川彰博
2. 発表標題 不思議や謎に挑戦する子どもたち：これからの保育ができること
3. 学会等名 日本保育学会第4回中部地区研究集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 心理科学研究会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 303
3. 書名 新・育ちあう乳幼児心理学	

1. 著者名 『質的心理学辞典』編集委員会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 267
3. 書名 質的心理学辞典	

1. 著者名 富田昌平	4. 発行年 2017年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 312
3. 書名 幼児期における空想世界に対する認識の発達	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------